

平成 24 年度 情報交換会

開催日：平成 25 年 1 月 31 日（木）15:00～17:00

場 所：スタジアムプレイス青山 9F ビジョンホール

2020 オリンピック・パラリンピック東京招致について

I. 講演 《演題：東京オリンピック・パラリンピック招致活動の現状と見通し》

講師

望月 敏夫 氏 元駐ギリシャ大使
2020 年東京オリンピック・パラリンピック招致委員会
評議会スペシャル・アドバイザー

II. 対談 《テーマ：招致活動を含む近年のオリンピックの特色と課題》

対談者

望月 敏夫 氏 前出
舩本 直文 氏 首都大学東京 教授
NPO 法人日本オリンピック・アカデミー理事
(オリンピック研究委員会委員長)

III. 情報交換

全員参加

I. 講演

演題：東京オリンピック・パラリンピック

招致活動の現状と見通し

講演者：望月 敏夫 氏

望月 望月です。どうぞ、よろしくお願ひします。

最初に、今、招致活動のビデオをいろいろ作っておりますが、ウォーミングアップのつもりで、ちょっと見ていただければと思います。

(ビデオ上映)

(以下、パワーポイントを使って説明)

望月 いよいよ招致活動が本番を迎えております。今日は、皆様に基本的な、何が起きているか、今後どうなりそうかということをご説明しまして、さらに東京招致のご支援をいただけたらと思っております。手短に全体像をご理解いただけるようにご説明いたします。

もともと私は外務省の者でございますので国際関係をやっているのですが、いつも講演をするときに、必ず「地図を見てください」というところから始めます。なぜかという、

国際問題、いろいろ議論をする際に、一種の臨場感というか、現実感というか、意外と地図を普通は見えていないのですね。皆さんはだいたい分かると思います。シンガポールとバンコクがどこかなとか、赤道の上か下かとなると、だんだんおぼつかなくなりまして。さらには、このあいだ問題になった痛ましい事件のアルジェリアとか、今、シリアでパチパチやっておりますが、そういう事柄について、現実を見て、距離感と方向性というのを感じつつお話したいと思っています。私のお話の中でも、できるだけこの地図に戻ってお話したいと思っています。

今日の話の筋は、初めに、序論的に最新の話題を幾つかお話ししまして、ロンドンオリンピックの余韻にちょっと触れまして、そのあと、オリンピック招致を話すためには、やはり、オリンピックとは何かとか、最近のオリンピックの特徴、趨勢というのを理解してからでないと招致活動そのものが分かりませんので、私は、自分の職業上からでございますけれども、特に国際政治、外交の面からオリンピックの特徴という点を序論としてお話しいたします。

そのあと、本論に入りまして、招致活動の日程とか、仕組みとか、今、3都市が立候補都市ということで、東京のライバル、マドリード、イスタンブール等についてお話ししまして、また、私がいつも申し上げておるのですが、オリンピック+パラリンピックなので、パラリンピック大会を忘れてはいけないという意味でお話しして、最後に、オリンピックというのは、スポーツと社会の関係が凝縮されたものですので、そこに日本のスポーツ界の特徴、強み、弱み、課題というのがいっぱい詰まっています。日本スポーツ界の課題は何かなど。私は門外漢なのですが、門外漢から見た、そういうお話をしたいと思っています。ちょうど、女子柔道に対する、暴力というか、指導の問題、大阪の高校の問題とか、なかな

か難しい日本スポーツ界の問題というのが起きておりますので、それについて、もし、最後に触れることができれば、できるだけ全体像をフォローしていきたいと思っています。

最近の話題ですが、立候補ファイルという、どういうオリンピックをやるのか。東京でどういう目的で、どのようなオリンピック、どのような計画に基づいて、メインスタジアムはどこか、選手村はどこかというように。これをオリンピック立候補ファイルに、200ページくらいあるものですが、1月7日が期限でしたので、ローザンヌでこれを提出しました。ここから「ヨーイ、ドン」で国際招致活動が解禁になります。この人はジルベール・フェリさんといまして、IOC 国際オリンピック委員会の事務局長役をしている方です。これは水野専務理事ですね。今、八面六臂、あちらこちらを飛び回っておられます。

すぐ、続いて猪瀬さんがロンドンに飛びまして、吉田沙保里さんと一緒に、これは竹田さんです。ロンドンで記者会見をしまして、日本はこういう、特に東京はこういうオリンピックをやるのだという説明を外国人記者に対して行いました。

ちなみに、昨日、オリンピック関係の評議会という会合がありまして、猪瀬さんがそこで言った言葉は、東京オリンピックではなくて日本オリンピックだということで、東京だけが頑張ってもダメだと。日本全体の支援が必要だということを強調しておられました。東京都の支持率が73%にいましたので、非常にタイミングがよかった。おかげさまで、東京のみならず日本人、国民全体の支持率も上がっております。

これもロンドンの記者会見です。

澤さんです。

これは、8月の末に銀座でロンドンの報告パレードをしまして、50万人の人が歓迎してくれました。これは準備がたった1週間ですけれども、50万人の人が関心

を持って集まってくれました。

これはその一部の写真です。

これがロンドンオリンピックの全メダリストです。37個、金・銀・銅なのですが、それ以上に人がいるわけです。これは団体種目でメダルを取っていますので。ただ、ロンドンで残念だったのは、金メダルが7個なのですね。37分の7で。私は、大使をしていた時、アテネオリンピックとちょうどぶつかりまして、アテネの場合は金メダルが16個だった。全世界で5位でした。もう、地元の人からは、どこへ行っても“Congratulations”と言われてまして、私は鼻高々だった。やはり、金メダルを取ることが非常に重要ですね、国際的には。私は冗談まじりに、世界のスポーツ界は金本位制だと言っている。全体のメダルの量も大事なのですけれども、今後は、金を目指すことが大事ではないか。

東北にも行っていただきまして、これは金メダリストの松本薫さん。柔道で金メダルを取った。それから、銅メダルを取った男子柔道の選手と、この人たち、パレードを仙台でしまして、オリンピックというのが東北被災地の皆様の精神的な支えとなり、復興を早めるというのが東京オリンピックの大義名分のひとつでございます。

これはロンドンの場面です。大変いいオリンピックでした。非常にオリジナルな開会式でした。聖火を分散して、普通は1本にするのですけれども。

ここはロンドンの都市開発の非常に成功した例ということが言えます。このあたりは、ロンドン東部の一番未開発の地域でした。それが、川と、木を植えて平らにして、本当に7年間。普通、オリンピックは7年前に決まるのです。7年間で非常に立派な都市再開発ができました。東京の目的のひとつは、東京オリンピックによって、東京自身の、ないしは日本を含めて、全体のインフラが変わってくると。64年のオリンピックの時に新幹線

ができたり、首都高ができてたりしたので、それと同じような、さらにそれを上回る効果が期待できるということです。

ロンドンオリンピックは大事ですので、ポイントを話しますと、もともと7年前に決まるわけですが、本当に4票差で、当時100人弱のIOC委員のうち、パリと接戦をしまして、4票差で。3票違っていたら、去年はパリオリンピックだったのです。それが決まった直後に、翌日、こういうイラク関係絡みの、イギリスはイラクに派兵しておりましたので、56人の犠牲者、こういう背景のあるオリンピックでした。今回のロンドンオリンピックも非常に国際政治的なリスクがございまして、テロの危険性、実際にテロを計画しているという事案が3つくらいあり、これはイギリスの当局がうまく押さえ込んだということで、その点、ある意味で背景がなかなか難しいオリンピックだったと思いますが、にもかかわらず、これをうまくやりました。

あと、ロンドンが卓越している点は、その理念、若者中心を前面に出したということ。それから、競技施設も立派ですし、大会の運営もうまくやった。あと、節約。イギリスは、ヨーロッパ経済危機、ユーロには入っていませんけれども、当然ユーロ危機の影響があつて、その中で財政赤字がずっと続いて、マイナス成長だったから、節約に努めた。市民参加型、女性も非常に活躍した。これをまとめて、私は、先進成熟民主主義型オリンピックと名付けております。これが、我々の2020年、東京オリンピックのモデルになりえます。国際的にロンドンオリンピックというのは、2000年シドニーオリンピック以来、ベストのオリンピックではないかという評価ですので、今後、オリンピック開催地決定のときに、ロンドンを超えられるか、超えられないかということで、一種の物差しになっているという評価です。

オリンピックは、ないしはスポーツは、国

際政治、外交という政治的な外圧、それから、ナショナリズム、メディア、経済問題、商業主義、ほかにもいろいろ、スポーツ外的要因と私が名付けているものの全体をひっくるめた総合現象なのです。スポーツ、つまりオリンピックは純粹培養の現象では、今やまったくなくて、社会のあらゆる側面を代表している。そのうちの大事なものがこういうものです。スポーツに対する政治、外交の影響力については、招致活動自身もそれから免れることはできない。むしろ、それを念頭に置いて招致活動をしなければ勝つことはできないということを、冒頭に一般論的に申し上げたいと思います。

国際政治、今、いろいろ止むことなき問題があるわけですが、国際社会というのは2つの側面、まったく違った、競争・対立の側面と、もうひとつは協調・共存の側面、そういう2つの側面のせめぎ合いということです。

競争・対立の側面というのは、日本のみならず各国の国内では考えられないような仁義なき競争というか、中国の尖閣諸島に対する行いとか、北朝鮮のミサイルないしは核実験の恫喝という、国内社会ではないようなことが国際社会では平気で起きている。そういう側面が、ひとつある。今は、特に自国中心主義的な面が非常に多く、かつ、民主主義国家、資本主義社会でも国家主導という点が非常に前面に出てくる。これがスポーツにも影響している。

他方、ポジティブな側面も当然あります。世界平和を目指す国連中心のいろいろな努力、そういうものが協調・共存の側面といえる。そこでは、相互理解、友好、国際協調、紛争が起きれば平和的に解決しよう。最終的には国際平和。こういう理想的な側面というもの、ひとつ強くあるということで、それがまたスポーツの世界でもスポーツ自身が普及して社会的価値が非常に上がっていく。かつ、スポーツ権という、人権としてのスポーツ権

が世界中で確立しつつある。日本でもスポーツ基本法ができ、その中に明確にうたっている。女性の進出も、こういう平和の側面のおかげです。スポーツ・フォー・オールといって、選手のためだけではなくて、老若男女のすべてのスポーツ。その結果、スポーツがボーダレス化して、グローバル化していく。日本のサッカーの選手が世界中で活躍、ヨーロッパで活躍する。特にスポーツビジネスがこのおかげで発展していく。

その反面、対立・競争の側面というのは、スポーツの世界で競争が激化して、本来のフェアで友好的なスポーツであるべきものが、メダル獲得競争、大会招致、まさに今やっているオリンピック招致。こういう競争が激化していく。ルールセッティング、これも、自国に有利なようにスポーツのルールを変えてしまうというのがしょっちゅう起こっている。ドーピングの問題も。ステートプロ、国がプロを養っていく。中国、旧共産圏はこういう傾向が非常に強い。年齢を詐称してまでメダルを取りたい。スポーツ・ナショナリズムは、そのまさに裏返しなわけです。その結果、国家がスポーツに非常に関与してくる。もともとスポーツは、国家とは自立した現象であるべきなのですけれども、お互いに、スポーツが国家に支援要求をしないと成り立たないという世界になっています。その背景にあるのは国際情勢のこういう競争・対立の側面であるということです。

こういう面をまったく理解しないでスポーツの話をするのは現実から離れているのではないか、というのが私の考えです。

例えば、日本人の国際ポストは、非常に少ない。IOCは、今、竹田さんが1人いるだけで、室伏さんが当選したけれども、今、仲裁裁判所にかかっている最中です。今、101人のうち、IOC委員は1人しかいない。IAAFとか、FIFAとか、国際水連とか、これも会長はいない、副会長が7人、理事が6人。AFとい

うのはアジアのフェデレーション。アジアでもこれだけ。こういう世界では、やはり、国際ポストで上に立っていないと、ルールセッティングで、国際ルールも、すぐ変えられてしまって、発言力がない。ましてや招致活動に対する情報も少ないし、影響力も少ない。

ここからが本論になります。これから、1月7日から始まって9月7日までに何が起きるかという点をお話ししていきたい。

立候補ファイルを出して、3月4日から1週間、滞在期間は1週間、IOCから視察団が来て、計画書が本物かどうか、本当にできるかどうか、現地視察を行います。IOC委員、専門家を含めて20人近い一団が来るわけですが、彼らがそれを視察して、報告書を6月に出します。これが、昔は通信簿、最近は成績表。東京とマドリードとイスタンブールにそれぞれ行くわけですが、これを見て100人ちょっとのIOC委員が投票するわけです。もちろん、報告書だけが、IOC委員の投票行動に関係するわけではありませんけれども、公的なIOCとしての評価がここで出るわけなので、当面、夏までは、この評価委員会の日本訪問というのが一番大事なきっかけとなります。最後に、9月7日、ブエノスアイレスのIOC総会で投票が行われる。こういうことですから、あまり時間がないのです。あと本当に7カ月を切っているというような感じです。

前回2016年招致では、評価委員会が来た時に何をしたかといいますと、麻生総理にプレゼンテーションをやってもらいました。それから、石原知事にもやってもらいました。

麻生さん主催の晩餐会。ただ、1回だけ立候補都市がこういう晩餐会を許されていて、女王陛下がやったり、国王がやったりするわけですが、日本では総理にやってもらいました。

2016年の話。オバマさんが来まして、シカゴが立候補していますので。

最後、この泣いている人はルーラ大統領、ブラジルの大統領です。辞任しましたけれども。この人は先頭に立ってオリンピック招致をやっていました。大統領が世界中を飛び回ってやるくらいでないと、今のオリンピック招致はなかなか勝てない。猪瀬さんは、日本全体が一致してやらないとダメだと盛んに強調しておられました。安倍総理も、今回の招致活動には最大限協力すると言ってくれました。

オリンピック開催都市がどういう仕組みで決まるかと言いますと、2段階あります。最初は書面審査で、これは去年の5月に済みました。足切りが行われて、最初、アプライする申請都市というのが5つ、5都市ありまして、それから3つ、3都市にまで絞った。足切り試験です。その結果がこれです。これはすべて公表されます。今年の5月、東京、マドリード、イスタンブール、ドーハ、バクー、全部、点数で出るので。選手村はどうだとか、大会運営の実績があるかとか、輸送、ホテル、ドーピングは問題ないか、財政問題は大丈夫か。それで、「○」「○」「○」で、ドーハが「△」、バクーはダメでした。ドーハはなかなか健闘したけれども、カタールの夏は暑い。8月にやるとしたら、40℃、50℃、湿度が90%とか100%。彼らは10月開催というのを提案したのですね。それはIOC側の決定に反するというので、今は7月から8月ということになっておりますので、ドーハはこれで落選しました。

東京のライバルもまじえて、国際キャンペーンが1月から解禁になる。解禁という意味は、外国に出かけていって、東京のPR、プロモーション活動、ロビー活動をやってもいいということです。あと8カ月間、1月からできます。不思議なことに、みんな地中海の諸国が残っています。

第2段階は、まさに選挙そのものです。これはIOC委員の投票です。定員は115名です

が、現行は101人。IOC委員は、大陸別にいますと、アジアが23人、南北アメリカが18人、ヨーロッパが43人もいる。ほぼ半分近く。アフリカが12人、大洋州が5人。なぜヨーロッパがこれだけいるかというと、これは国の代表ではないのです。

地域別に、こういう非常に不均衡な割合になっているのですが、特にヨーロッパの場合、43人です。日本は、地盤としまして、基礎票を23、アジアから推薦してもらおうように、今、いろいろ働きかけているわけです。マドリード、イスタンブールも半分ヨーロッパだといっているわけですが、こういう票をいかに切り崩して取るかというのが鍵です。

IOC委員の101名の選挙母体。これは101名が現行の人数なのですが、規定上は115人。こういう一種の選挙区があって、自由選挙で75人、あと、選手代表、国際競技団体代表、NOC、各国のオリンピック委員会、日本でいえばJOC。これが15人ずつ。したがって、国の代表ではありませんので、どうしてもある1カ国に重なる。イタリアは3人いるとか、スイスは4人いる。日本は従来から2人が最高で、今は竹田さんだけ。しかし、自国のIOC委員がいないと、当然、情報量とか働きかける力が違います。日本の役員の表と同じですが、国際競技団体で役員を取っていないと戦うのが不利になるということが現実です。

第2段階の投票のときは、これはまったく個人の投票ですので、最後まで票読みが難しいのです。国連等の選挙ですと政府が投票しますので、だいたい事前に分かるのです。お互いに、口上書といたしまして、文書を交わしまして、例えば日本とアメリカは、アメリカは日本を支持する。その代わりに、アメリカの次の選挙の時は日本が支持しますと約束ができるのですが、個人はまったく当てにならない。大阪が前に立候補しまして、23票取れ

るといっていた。大阪の人たちは一所懸命にやりました、結局、最終的には北京に負けた選挙だったのですが、実際は、あの時、6票しか取れなかった。IOC委員は立派な人なのですけれども、別にウソをつくわけではないのですが、みんな「俺は入れてやる。大丈夫だ。Don't worry」とか言って、どうしても最後まで票読みが難しいので、最後まで分からない。そこを何とかする者が勝つ。

投票の仕方は、デビッド・ミラーというロンドンタイムズのスポーツ部長が、オリンピックの選挙というのは、死刑執行と盛大なる戴冠式のようなものである。これは、なぜ死刑執行ということか。順繰りに選挙していきますので、落ちたほうの名前を発表するのです。ですから、前回も、まずシカゴが落ち、東京と次に言われたときは本当に心臓が凍るようでしたけれども、あれはまさに公開死刑執行。最後に残った戴冠式は、ブラジルのルーラ大統領のように男泣きするという、そういう選挙です。

そういう選挙をどうやって戦っていくかという、当然、人脈。IOC委員の、今、101人ですから、過半数を取ればいいわけです。最後の決選投票で過半数以上を取る。各IOCの人脈をたどって、どういう絆があるかとか。これは石原前知事の好きな言葉で、魑魅魍魎(ちみもうりょう)、旧制一高の校歌にありますね。要するに、お化けの世界です。IOCにこんなことを言うと怒られるのですが、本当に海千山千というか、立派な人が多いけれども、いろいろな自分の思惑があるわけですね。ですから、彼らにうまく食い込んで、9月7日に、あれはボタンで押すのですが、東京のボタンを押してもらおうという、そういうキャンペーンがこれから待ち受けているわけです。

そのためには、投票権者の委員だけでなく、その家族、奥さんが非常に大事です。奥さん、または旦那様ですね。あと、友人。こ

それを克明に調べて、奥様が日本の虎屋の羊羹が好きだということを突き止めると、ちょっとそれを差し上げる。あまりやると、倫理規定というのがありまして、基本的にノーギフト・ノービジット・ルールというのがあ。ギフトはしてはいけない。ノービジットというのは、立候補都市を訪問してはいけないということ。要するに、そこにスキャンダル、賄賂、饗宴される素地が出てくるからということなのです。それが IOC 行動規範に詳しく規定してある。したがって、そこも上手に、羊羹くらいならいいんじゃないかということ差し上げたりする。

あと、働きかける対象は、IOC ファミリーといい、IOC 委員を取り巻く事務局の人たちです。あと、IF、FIFA とか、国際陸連とか、そういうところの幹部、各国のオリンピック委員会。NF というのは、日本陸上連盟とか。そういう人たちが IOC 委員になっている人もいますので、そこら辺にアプローチしていく。

あと、政府の影響というのが強くて、101 人の政府バックグラウンドをいろいろ調べていきますと、だいたい半分近くが母国政府の影響がある。ないしは、母国政府とケンカして亡命している IOC 委員もいます。したがって、間違っ母国政府から働きかけたりすると逆効果になる。そこは気をつけながらやる。そういうときは、首脳会談、例えば、安倍さんが例えばアメリカに行ったりするときは、当然、オバマさんに、今度、シカゴは出ていませんから、東京を頼むと。アメリカの IOC 委員に、ぜひそれを伝えてくださいということをお願いする予定です。あと、外相会談というのもしょっちゅうありまして、お客さんが来たり行ったりしますから。各国の日本大使館を通じていろいろ働きかける。

あと、大事なものは、ビジネスのつながり。IOC 委員が 101 人いますと、日本の例えば商社の商取引があるとか、例えば、ソニーの代理店を営んでいるとか、お兄さんが日本の

企業の関係者であるとか、そういう点も、日本企業、今度、東京商工会議所をはじめ経団連も非常に協力していただいていますので、情報をいただいて、そこからこういう人脈、絆を伝えて働きかけていくということです。前回の 2016 年の招致活動を 3 年間やりました。あの時は私もそれに加わっておりましたけれども、最初は本当に手探りで、こういうことは一朝一夕にはできないのですね。これは選挙ですから、最終的に。日本の国内の選挙も同じだと思うのですね。国際的な選挙だと、もっと分かりにくい点がありますが、前に下敷きがありますので、2020 年の招致活動はかなり楽になって、情報をアップデートしていくことで、その結果、猪瀬さんが昨日言っていたように、国家の総力戦として、いろいろな企業の皆様、政府とか、個人的な支援をいただくということです。

選挙運動ですので、公職選挙法と同じような IOC のルールがあります。このルールが結構ルーズでして、その灰色のところをうまくいかいぐってやるのが大事。あまりやりすぎると IOC 当局から注意が出されます。それをイエローカードといいますけれども、その注意が他の都市にも全部公表される。ただ、ロンドンが当選したときは、イエローカードを 40 枚もらったというのですね。40 枚もらっても、レッドカードにならない。したがって、イギリス人というのはそこら辺が、ああいうしたたかな人たちですから。そこら辺は、蛙の面に何とかというような顔をして、うまくやる必要があると、つくづく思っております。

あと、FIFA も、日韓共催のあと、もう一回、2024 年でしたか、やりたいと。これも負けました。やはり、政府の支援なしにはちょっと無理だなと、当時、何回も小倉さんは言っていました。

これは IOC 本部です。ローザンヌにあります。IOC の会長さんが非常に影響力があつて、

その意向で開催地が決まるわけではないですけど、影響力がある。サマランチさんが20年も、1980年～2000年まで、サマランチは帝王と呼ばれていました。彼の影響力で当選したサマランチ・チルドレンという20数名のIOC委員がヨーロッパ中心におりまして、それが、彼は亡くなったのですが、いまだに影響力があるということです。ロゲさんは天皇陛下にも拝謁しまして、本当に絶大な権力で、私は冗談でいつも言うのですが、生まれ変わったら何になりたいと聞かれて、総理大臣になりたいとか、野球の選手になりたいとか、いろいろありますけれども、私に聞かれれば、IOCの会長になりたいと即座に言うほど、やりがいもあるでしょうけれども、権力も大きいということが言えます。

東京の強み、弱み。お手元のパンフレットに書いてありますが、あえて繰り返しません。東京にやらせれば絶対安心だ。これはもう間違いない。したがって、書面審査で点数も1位ですし、ロンドンの公認賭け屋、このあいだ、お正月に出たときも東京が圧倒的に掛け率が低かった。低いというのは競馬と同じで、マドリードやイスタンブールはかなり高い。東京が一番低かったし、ついこのあいだ、アラウンド・ザ・リングズという業界新聞、アメリカの新聞では東京が一番でした。計画力、都市力、財政力、文化、ここら辺はまったく問題ない。

それに加えて、東京オリンピックの理念とか大義、これは英語で“Discover Tomorrow”といって、未来に向けてオリンピック活動を広げていこうということでPRをしている。いつも言っているポイントが3つあり、当然、スポーツの振興、日本の再生、これには大震災の復興を加速させると。経済効果も、産業連関表で調べてもらったなら3兆円ある。なぜ各国がやりたがっているかというのは、これもあるのです。

もうひとつ大事なものは、オリンピックをや

ることによって日本の対外発信、国際的なプレゼンス、昔流に言えば国威発揚です。国威発揚が、なぜ悪いか。全然悪いことはない。中国、韓国、そこら中が一所懸命にやっています。競争の激しい世界では、これをやらなければ地盤沈下するだけで、相手にされない。したがって、これを日本の得意な分野である平和貢献というところに持って行く。これがオリンピックの理念、大義名分です。

ロンドンモデルを進化させ、東京モデルにしていく。これは、イスタンブールという、まだ遅れているトルコ、大変勢いのある国ですけれども、そこを差別化するという。昨日発表された支持率も、全部で73%までいきました。去年IOCがやった時は47%だった。

東京の弱みは、地震、原発、電力といわれているけれども、地震については、ほかの国も当然あり得るし、東京の耐震構造とかテクノロジーという点、原発についても完全に押さえ込んでいるということで説明しております。2度目の東京開催はどうかということも言われる。最終的に、よく言われるのは、オリンピック招致レースのフロントランナーはフェイルするというけれども、こういうジंकスをとにかく破っていきたい。

これが国立競技場の改装計画。ザハ・ハディドというイラク系のイギリス人が国際コンペで当選しました。今、一所懸命、日本の宣伝をANAやJALにいろいろ張り付けてやっています。スカイツリーでもやっております。

マドリードは、もう4回目の挑戦。東京も今度2度目。やはり、4回やりますと、やり方が習熟して改善しますし、同情もある。ご承知のとおり、ヨーロッパ経済危機のさなかにありますから、彼らは、それを逆手にとって、スマート五輪と言って簡素化して、競技施設が、もう8割も完成している。もう、お金をあまり使う必要はないと。支持率も高い。王様を先頭に、皇太子も選挙運動で電話をか

けまくっている。したがって、こういう点がヨーロッパの立候補都市の強みです。サマランチ・チルドレンもこれだけいる。なかなか立派な街です。

イタリアは経済危機で既に撤退。

イスタンブール。日本の一部新聞は、イスタンブールが先行しているとか、イスタンブールが本命だなんて言っていますが、何を根拠に言っているか、まったく分からない。オリンピックをやりたくないから、おそらくそう言っているのではないかと思う。確かにトルコの強みというのは非常に大きい。しかし、彼らも5度目。5年浪人して、万年最下位だったのですが、今、イスラム圏で初めてとか、東西文化融合とか、誰にも分かりやすい標語で訴えていますので、国民の支持率も高い。新興国トルコというのが、いわゆる新しい世界の勢力、経済的にも、外交的にも、成長率もこんなに高い。エルドアンさんという首相の外交が非常に上手であるということです。

ただ、課題は、すぐ隣のシリアで大きな戦乱が、内戦が続いているということ。かなりトルコもこれに巻き込まれています。難民も非常に入ってくる。シリアと一番長い国境を接している国がトルコ。長い国境がある。中東問題もあるし、今朝もイスラエルがシリアを爆撃したというようなことで、こういう安全保障リスクは大丈夫かという点。トルコ人は、みんな個人の意見が強くて、内部が不統一であるというところ です。

この街、きれいなのですが、ここでオリンピックをやると、こっちとこっちで、東京は東京湾から皇居を含めて8kmで、だいたい15分くらいで選手が競技場に8割くらい届くのですが、この2つに分かれて、どうするのだろうなという、そういう弱点があります。

今、2020年を目途にやっておりますが、実は、2024年のオリンピックともいろいろ関係があり、既にこういう候補地がいっぱい

出ている。パリは100周年であるとか、ドイツもやりたいと言っていますし、アメリカも、そろそろアメリカの番だ。シカゴがもう一回やりたいと。アフリカが、南アがFIFAの世界サッカーでうまくやりましたので、今度はアフリカの番だというようなことで、これとどうやって東京がディールするかですね。そこが難しい。しかし、難しいけれども、例えば、パリに2024年は入れてあげるから、今度は東京に入れろとか、そういうこと。しかし、ヨーロッパの国もいろいろおりますし、そこら辺、今後、うまく見渡してやる必要があります。

最後、パラリンピックですが、ぜひ、これを忘れないでください。パラリンピック、オリンピックとの2本立てです。障害者の地位というのは、日本でまだまだ遅れた面もありますけれども、オリンピック・パラリンピックをやることによって障害者の全体の地位が上がるということは間違いありません。ロンドンでも非常に活躍しました。これは水泳の秋山里奈さんですね、金メダルを取った。

日本のスポーツ界の課題はたくさんあります。ただ、ひとつ申し上げたいのは国際化ですね。日本のスポーツ人は、国際的な発音力、それがないと、ルールセッティング、ポストも、今の状況だと勝手にルールを変えられてしまう。そのためには人材を育成して、タフな人材、国際経験のある人材。最近、若い人がだんだん育ってきておりますけれども、この取り組みも必要である。途上国も支援するという。そういう中で、日本が全体的にスポーツ界の底上げをすることでオリンピックを招致できる。そういうことが言えると思います。

II. 対談

テーマ：招致活動を含む近年のオリンピックの特色と課題

対談者：望月 敏夫 氏、舛本 直文 氏

舛本 皆さん、どうもこんにちは。舛本と申します。

これは、皆様ご存じの2020年五輪招致のロゴマークですね。ここに非常に美しい言葉が書いてありますが、この「夢の力」というのに引っかかりました。これはどんな意味なのでしょう。か。「感動」という夢なのでしょう。か？今、東京には「この感動をニッポンで」というポスターが沢山飾ってあります。今日の参加者は、経済関係、ビジネス関係にお詳しい方ばかりですので、「経済発展の夢」なのでしょう。か。あるいは、「安心・安全」なのでしょう。か。また、この「夢の力」は何のために必要なのでしょうか？経済復興なのか、震災復興なのか、日本のプレゼンスなのか、世界平和への夢なのでしょう。か？

それで思い出したのが、1964年の東京オリンピックの記録映画です。亡くなられた市川崑監督の作品ですね。これが東京五輪のロゴマークですが、この映画は「オリンピックは人類の持っている夢のあらわれである」という字幕スーパーから始まります。そして、太陽のアップで記録映画がスタートするのです。エンディングでは、「夜、聖火は太陽に帰った。人類は4年ごとに夢を見る。この創られた平和を夢で終わらせていいのであろうか？」という字幕スーパーが出て、また太陽のアップシーンで終わるのです。1964年当時、市川監督は、オリンピックは「人類の夢」「平和」だというメッセージを出されたのです。特に太陽の下の平等ということですね。オリンピックで平和な世界を創っていこうという夢を語っていらっしやいました。

2020年に向けた夢もこうあって欲しいなと思います。私は、国際政治にも経済にも疎い方ですが、スポーツの理念的な研究をしていますので、こういったようなことを常日頃、考えております。

先ほど、望月さんから招致活動の概要とポ

イントや国際政治関係のお話をいただきましたが、やはり招致活動で大切なのは計画の中身とロビー活動だろうと思います。今、招致委員会では、招致を盛り上げるための支持率アップの活動を中心にやっておられます。しかし、それはちょっとおかしいだろうと私は思います。やはりロビー活動中心でなくてはいけません。2012年ロンドン大会でもさほど支持率は高くなかった。しかし、いざ始まるとど〜んと盛り上がった。おそらく日本もそうなると思います。

IOC委員を招致活動の対象にして、そこで顧客戦略を立て、彼らが投票してくれるためにどうしたらいいかということを中心に活動していかなければならない。IOCは、招致することで何を求めているか、ということです。あるいは、IOC委員たちは招致都市に一体何を求めているのか、というようなことを知っていかななくてははいけません。

あるいは、競合相手であるイスタンブールとマドリードの計画の中身と活動を熟知していかななくてははいけません。これには、少し古い分析方法ですが相手のSWOT分析が有効。

当然、東京も自分達の弱点を知り、強みを強調して戦略を立てていく必要がある。

SWOT分析とは、Strength（強み）、Weakness（弱み）、そしてOpportunityとThreat（機会と脅威）という頭文字でできています。内部環境は自分たちの努力で変えていくことができますが、こちらの外部環境はなかなかそうはいかない。

私は、弱みとして特に活動の中心人物がいない、開催計画自体にも、あまり際立った特徴は見えないという気がしています。

脅威では、地震、原発、エネルギー不安。停電したらどうするのかという質問が、IOCから出たそうです。ピョンチャン冬季五輪が近い、イスタンブールやマドリードの強み、IOC委員の魑魅魍魎性、こういうものが脅威になる。

欧州経済危機はチャンスとしてみなすことができる。

同じようにイスタンブールを分析すると、イスラム圏初開催、これが強みと言われている。また、ヨーロッパとアジアの架け橋になるとして、開会式と閉会式をヨーロッパ側とアジア側に分けて開催するという計画も出しています。支持率も高い。

ただし、機会としてヨーロッパがイスタンブールを支持するかどうか、ここは疑問です。

弱みとしては、都市インフラの未整備、交通渋滞問題、大きな国際大会を経験していないこと、これらが弱点と言えるかもしれません。

ただし、イスラム圏初開催という強みが脅威にもなります。最近の国際政治では、シリアとか難民問題も脅威のほうに入ってしまうから。

マドリードの分析では、強みでは、4度目の招致、スマート五輪、高支持率、やはりサマランチ元 IOC 会長の遺産が結構あると思います。IOC 委員には共感を持っている方もいます。前回の 16 年の時、サマランチ関係でかなりの評価をもらっていますが、それがどこまで続いているかということだと思います。

24 年パリ立候補との関係が、やはり大きな脅威になると思います。

次に、知っておいていただきたいのがレガシー（遺産）です。東京招致ファイルの中にレガシー委員会を設置するということが書かれています。それは、オリンピックによって正の遺産を残して、それをずっと引き継いで欲しいという IOC の願いがあるからです。実はレガシー委員会をどの都市も作らなくてはいけないのです。というのは、Olympic Games Impact Study、通称 OGI と呼んでいますが、12 年間でオリンピックの影響に関するレポートを 4 本出さなくてはならない。オリンピック開催によっていい影響、悪い影響

の両方があるわけですが、大きくは、環境、社会・文化、そして経済、この 3 分野で報告書を出さなくてはならない。都市だけではなくて、地域や国、あるいは国際スケールで 120 の指標によって長期の影響評価をしないということです。今、手を上げていますから、今年決まる 2 年前のデータをベースライン・レポートにします。中間報告が大会前と、もうひとつ中間報告が大会の最中、そして大会終了後の評価、これは 3 年後に出します。

まず、環境関係の指標にはこのようなものがあります（スライド添付資料）。これらの指標に基づいてレポートを出さなければなりません。

社会・文化面の指標には 12 分野 40 領域の沢山の指標があります。このようなものに対して、オリンピックがどのような影響を与えたか。いい方向に変わって欲しい。こうしてみますと、かなり幅広い。マイノリティ集団に対する影響。文化活動、教育、健康、栄養状態、障害者アスリートへの支援と教育などをどのような影響を与えたか。このような幅広いことに対するレポートをしなければいけない。

経済関係の指標は 9 分野 32 領域あります。雇用、観光、消費者物価指数、ホテル料金、住宅産業、組織委員会経費、開催経費や資本投資、触媒効果、五輪活動費の割合、消費者支出経済とか幅広いですね。Gross Regional Product という言葉を使っていますが、GDP も関係します。それから経済の持続性です。このような項目についてレポートしなさいということになっています。

Bid File（計画書）は 14 分野にわたる計画です。IOC の質問に答える形で開催計画書を作ります。OGI レポートというのは、IOC が好影響を期待し、悪影響を避けたい指標です。それらを追跡してレポートしなさいということです。逆にいえば、オリンピック開催による好影響の PR になるということが言え

るかと思ひます。これらの影響はハード面だけではなくてソフト面もあります。短期的にも長期的にも当然あります。また、予期せぬ効果、予期せぬ悪影響、そういうインパクトも実はあります。このような面でのいい影響がもたらされるならば、トータルにみて住みよい東京や日本、あるいは世界の構築につながるはずだということになります。こういう形で指標化して見ていきなさい。そして、いいものをレガシーとして次の世代に遺していった欲しいというのがIOCのねらいです。

ですから、このような指標が示している側面にテコ入れをすることによって、東京モデルの世界へ発信というようなことも考えることができるかもしれません。東京のローカルなものがグローバルに展開していくようなグローバルなものであって欲しいと思ひます。安心・安全、ハイテク活用なども日本の好イメージとしてすでにあります。「おもてなし」も重要です。世界中に「もったいない」という言葉がマータイさんのおかげで通用していますので、日本語の「もてなし」も世界に通用するような言葉にして欲しい。さらに、オリンピックが開催されれば盛り上がるでしょうし、競技自体も盛り上げるという意味での「盛り上げ」ですね。これらの3つの「も・MO」も、日本の伝統文化として世界に発信して欲しいと思ひます。

最後に、今の招致活動を見ていると、やはり中心人物がいない。「招致はオールジャパンで」といっていますけれど、中心となる、核となる方が必要かなと思ひます。それはアスリートでも政治家でもいいでしょうけれど、不在といえます。当然、役割分担をしていくということも必要です。

ここに「活動のチャンスを逃すな」と書きましたけれど、様々な国際競技大会がありますが、そこにはIOC委員が必ず来ます。IFからIOC委員になった人たちも来ます。ところが、IOC関連の諸会議もあるのです。この

ような諸会議にIOC委員が来ることがありますので、そういうところもロビー活動のチャンスです。

日本は、オリンピック・ムーブメントの支援国としての姿勢が少し弱くて、IOC関連の諸会議がたくさん開催されるのですが、日本は全然手を上げないのです。こういった会議を引き受けないと、IOC委員にいい印象を与えられないだろうということがありますね。

IOCの評価委員会の現地視察は4、5、6の3日間ですね。午前レクチャー、午後視察というスケジュールで展開され、3月7日が記者会見ですね。

最後になりますが、東京オリンピック50周年が来年です。その記念イベントをやりますよということを、どこも声を上げないのです。JOCも、東京都も。「記念事業をやります」と世界に向けて声を上げたら、IOC委員を招待できますよね。これはオリンピック・ムーブメントのレガシー、東京五輪大会の50年の一つのレガシーだと、もっと強く主張してもいいだろうと思ひます。2020年東京招致の計画を見ても、50周年記念イベントが何も書いていない。少しもったいないように思ひます。こういうものを使って盛り上げていった欲しいなと思ひています。

望月 対談ということでございますので、私のほうから少し答弁を。舛本先生のおっしゃった大事な点で、国民の一般の支持よりは、IOC委員に食い込んで投票を取るほうに専念しようと。確かにそのとおりなのですが、投票する人に投票してもらわないとどうしようもありません。

ただ、投票動機というのが大きく分けて2つあって、ひとつは、頭で考える理性ですね。安全で安心な東京ということで、これはロンドンの公認賭け屋もアメリカの業界新聞も東京が1位になっているし、IOCの通信簿でも1位になっている。理性面ではいいのですが、

もうひとつ IOC 委員に影響するのが、パッションというか、熱意というか、熱い気持ち、東京、日本でやるのだ、やりたいのだ、それが世界のためになるのです、それでオリンピック運動の発展に貢献しますという、そういう熱き思いを彼らに伝える必要があるのです。その2本立てだと思います。それで投票が決まるのだと思います。

後者のほうは、やはり国民、都民の支持率になって表れる。IOC 委員が、これはすごいと。評価委員会が3月に訪日する件もそうですが、これはすごい、日本人は本気だなと思わせるような雰囲気と感じを醸し出さなければいかんということなのです。ですから、投票行動に直結するのは、もちろん IOC 委員に食い込んで、日本側の国民の熱き思いを伝えていくのが大事なので、2本立てでやっています。

舛本 前回の16年の招致の時にも評価レポートでは東京は高かったのです。

望月 1位でした。

舛本 IOC 委員は、今回の視察団が作る評価レポートに基づいて投票するかというと、どうも、そうではないという部分があって、「魑魅魍魎」といわれるような点も含めて投票行動を読むのは非常に難しい。計画面でいくら良くても、それが投票にスムーズに反映されないという、この構図に対して手を打たなくてはいけないと思いますが、その戦略を招致委員会はどうにお考えなのか、もう少しお聞きしたいと思います。

望月 そのひとつが、舛本先生のご説明の中で、招致の顔が見えないという感じでしたね。日本国は民主主義国なので、一人代表という人がいないのです。例えば、マドリードは王様と皇太子、王様のお姉さんまで、私も会っ

たことがありますけれども、それこそ一所懸命にやっている。先ほど、リオデジャネイロが当選した時のルーラ大統領、男泣きするほどの一所懸命な力の入れようですが、ああいう招致の顔というのは、日本の場合は JOC の竹田会長です。竹田さんが IOC 委員でもありますし、世界的な顔のつながり、絆というのが一番大きいので、いわば、「誰か一人、言え」といえば、招致の顔は竹田さんだと思います。ただ、竹田さんも、たった一人でやっているわけではありませんで、招致委員会の中には、水野さんが CEO になってやっていますし、小倉和夫さんが評議会の事務総長ということで、ここで、やはりオールジャパンということなのです。日本のスポーツ界は国際的なつながりが当然あるわけなので、スポーツ界にも前線に出ていってもらって招致活動をやってもらおう。政界もそうですし、政府も、外交関係もそうです。ということで、一人で誰かがやっているということは日本ではないですけれども、全体でやるというのが、これは日本の社会の伝統的ない点じゃないですかね。集団でやると。企業でもそうですね。日本人の強いところ。全体一緒にグループでやる、その強みを生かしてやっております。

舛本 16年の時のリオの最終投票の前のプレゼンテーションにはペレもいました。オールジャパンとしてペレに対抗するような人は当然いないですけれども、何か対策は？

望月 ロンドンのときはベッカムが出てきて、ベッカムが相当票を集めたようです。室伏さんに、またやってもらいますし、それは影響力のある方がいると思いますから。既に、吉田沙保里さんとか、澤穂稀さんとか、オリンピック招致大使というポストを設けて、彼女たちに活動してもらっています。あれは、ペレやベッカムと同じようにやってもらいたいと思っています。

舛本 望月さんが少し触れられたのですが、オールジャパンを組みたいのですが、メディアによっては温度差がある。これも問題といえば問題ですね。いろいろな主張があっても、それはそれでいいでしょうけれども。その点について、招致委員会のほうではどのようにお考えですか。

望月 まさに、日本は、何回も言いますけれど、民主主義国ですから、はっきり言って悪いのですが、トルコと違って、支持率が90何%というのは本当はおかしいです。民主主義国では、それぞれ自分のやりたいことが、そもそもスポーツが嫌いな人もいるし、うるさくて嫌だという人もいるし、価値観が多角化しているのが民主主義の成熟国家というものです。まさに舛本先生がおっしゃったように、ロンドンがオリンピックが始まる前は支持率が52%くらいだった。それで、オリンピックが終わると、イギリスが金メダルをたくさん取ったせいもあるでしょうけれども、80何%になりました。それと同じだと思うのです。価値観の多様性ということがありますから、新聞もそれを代表しているのだと思います。ただ、本当に反対している新聞というのではなくて、若干半身に構えているという感じだと思います。今度、73.2%の都民の支持率というのを昨日発表しましたので、それを見て、新聞のほうも「なるほどね」と思うのではないかと期待しています。

舛本 ここにきて少し流れが変わってきているのだろうと思いますが、国際ロビー活動のほうの流れが変わらないと、どうにもならないと思っています。3月の4、5、6の評価委員会の視察の時の戦略で、オープンにできるものはありますか。

望月 戦略はないです。これは、要するに淡々と。17、8人のチームなのです。IOC委員と、

それぞれの分野の、交通の専門家とか、パラリンピックの専門家とかが来ますので、彼らが査察をするのは、今の計画です。計画どおりに進みそうかどうかと。東京の交通状況を見て、うまくいきそうかと。彼らにできるだけ自然に見てもらおうというのが戦略だと思います。変なことは、むしろ、しないほうがいい。自然体で見てもらって、それで点数を付けていただくということで、きっと、いい点になると思います、今までのところは最高点ですから。

舛本 前回16年招致の視察のときは3次元アイカメラのようなものを装着してもらって、実感的に視察してもらおうという工夫がありました。今度もそれはされるのですか。

望月 日本のハイテク技術をスポーツに応用する。それから環境技術ですね。それが今度のオリンピック、東京招致の目玉のひとつです。それをできるだけ見てもらおうというふうにしようかと思っています。

それから、国民のパッションですけれども、燃えるような熱き思いは、IOCの人たちが各会場予定地を訪問するときに、そこにアスリートとか国民、子どもたちに出てきてもらう。それでいろいろな歓迎をしてもらうということで、私どものような招致関係者がコンタクトするのではなくて、一般の、まさに国民、老若男女に触れてもらう。それが戦略です。

舛本 64年に東京オリンピックをやった時に、様々な都市改造が行われました。新幹線、首都高速、それから上下水道。それらはコンクリート構造物ですから、50年の耐用年数がきているわけです。そのために、補強したり、造り直すということも必要でしょうが、20年招致関係の方はそのような都市の再生のようなことをお話しにならないのですが、

何かそれは理由があるのでしょうか。

望月 再生については話しています。ちょうど2020年の東京オリンピックに合わせたわけではないですけれども、東京改造、東京2020年プランを東京都で作成しております。これによって東京の都市インフラ、環境問題、交通、例えば環状線を完成させるとか。そういう点を詳しく計画を立てていますので、それと、ある意味でたまたまタイミング的に合うということで、その計画、将来の東京像、都民の生活、日本の国民の生活がこれだけ良くなりますよという点を具体的なビジョンに基づいて売り込んでいます。

私から、ひとつ質問を。学者の先生から見て、学生はどうか、東京オリンピックに対して。先生の学生さんは。

舛本 オリンピック関連の授業を講義していますが、学生たちは非常に興味を持っています。16年のときは、「東京にオリンピックを呼ぶ学生の会」という団体がありました。彼らはかなり熱心に活動をして、招致委員会とも連携して活動していたのですが、今回はそういった声は上がりませんでした。それは非常に残念です。講義しますと、ぜひ見たい、生で体験したいという声をかなりの学生があげます。

望月 若い人から既に招致委員会に、2020年にボランティアをしたいと、もう申し込んでいかというような声までたくさん来ています。私どもは、ぜひ、その時、やってくださいと。ただ、まだ受かるか受からないか分からないので、受かるようにしますが、受かった場合、当選した場合には早急にボランティアの募集要項を作って皆様に。ロンドンの場合、30万人のボランティアがロンドンオリンピックの成功のひとつの要因だったと言われています。アテネでもそうでした。非常に

楽しいオリンピックでした。北京オリンピックは、やはりお国柄かどうか、ちょっと固い、国主導のオリンピックでした。街なかで、ロンドンもそうですけれども、ボランティアに代表されるような、国民自体に触れたオリンピックという。若い人の支持が一番大事なのです。

まだいろいろ話がありますが、もし、フロアの皆様から、ご意見、ご批判があれば。

III. 情報交換

水野 株式会社アクアビューティの水野と申します。ロンドンの招致の鍵というのは、英国王室の皇太子様などの動きがあったというふうには伺っているのですけれども、前回、東京が出てきたときに、皇室の方のお姿というのが見受けられなかったのですが、今回はそういったところはどうに活動されているのかなと思ひまして、質問をさせていただきました。

望月 ロンドンの当選した要因で、イギリスの王室の貢献というのはいろいろあったと思います。特にアン王女です。アン王女自身がIOC委員です。ですから、内部からいろいろ応援、支援、下支えをしたと思いますけれども。ただ、女王陛下自身が動くとか、そういうことはなかったと思います。スペインの場合、カルロス国王やフェリペ王子や王妃が熱心に支援をしております。それぞれお国柄と、それぞれの王室、皇室のスタンスの問題というのがありますので、もちろん日本でも応援していただいておりますが、どのように具体的にやっていただくかというのは、今回、まだそこまではいっておりません。

河島 RIGHT STUFFの河島と申します。一般の国民や都民の人が本当に個人で招致のためにできること、招致を呼び込むためにでき

ることというのは何かあるでしょうか。

望月 たくさんございます。ひとつは、ぜひ、募金に協力していただきたいのです。私ども、前回の反省に基づいて、総予算がほしい70億円で招致活動をやっています。国立競技場を改築したり、そのインフラ経費は別で、招致活動経費が75億円で、都のほうと招致委員会自身のほうで半分に分けて、今、お金を募っております。招致活動というのは節約型でやるのが筋ですし、そのようにしておりますけれども、やはり、先立つものがないと、なかなか十分できないという面もあります。企業からもいろいろご寄付をいただいておりますが、一般の国民の皆様からいろいろな形で、例えば、Tシャツとか、招致グッズを買っていただく。これは招致委員会のホームページに出ていますので、買うことができますから、ぜひ買っていただきたいとか、あと、2020年ネット基金といいまして、500円からの基金が振込でできるようになっております。

最近、さらに、招致委員会のホームページに出ていますけれども、Yahoo!と協力しまして、2020年に当選したら何をすることを公約しまして、それと同時に、少なくともよろしいので、募金活動に協力していただくのがひとつです。

あと、いろいろな集会、イベントをしておりますので、ぜひ、そういうところに出させていただいて、足を運んでいただければ全体の雰囲気と気分が盛り上がり、これが必ず外国やIOC委員の側にも伝わると思いますので、それに参加していただくということです。

それで、当選しましたら、ぜひ、ボランティアになっていただきたいと思います。これは石原さんが2007年にオリンピック招致の、いわば絡みで始めたのですね、東京マラソンというのは。3万5千人、今年は走れるわけですが、ボランティアの方はその10倍くら

い。申し込みに外れた方が、「いや、ボランティアでもいいから、ぜひ、何らかの格好で参加したい」という、非常にありがたい参加精神を持っておられます。同じように、この東京招致にもご協力願えればと思っております。

河島 そこに付け加えて、僕らは、ここに集まっている限り、たぶん招致したいと思っておりますけれども、それを発信しようと思っても、じゃあ、何の目的で、もちろん、招致のいろいろなものを書いてあるのですけれども、いまいち、じゃあ、このオリンピックを呼んだら何がいいことがあるのかということ、たぶん僕らも、好きな人たちも、ただ単に呼びたいと思っただけで、何で呼ぶのかということをもうまく発信できない。そういうものがないから僕らも発信できない。呼びたいと思っただけの人も、例えば、飲み屋で「呼ぼうよ」といっても、「何で呼ぶの」といわれたときに、実は明確な答えを持っていなかったりして。それというのは、たぶん、招致側からの呼ぶ理由が明確でないからだと僕は思っていて、さっきのいろいろな説明はあるものの、いまいち、この中で本当に呼ぶ理由が明確に分かる人ってどれくらいいるのかなと僕自身もちょっと思っただけ。

望月 本当に、おっしゃるとおりだと思います。おっしゃるとおりだというのは、国民の皆様にも、大義名分というのですか、それを浸透させるというのはなかなか、難しいわけではないけれども、私どもも努力しているのですが、先ほど、できるだけ簡単に3つ、スポーツの振興、日本国内の元気を取り戻す、日本国の国際的発信、その3つに分けて、それに貢献するのが東京オリンピックであるというふうに説明しているのですけれども、それでも難しいですね。それから、要するに、3兆円で、儲かるオリンピックだと。オリンピックをやれば、生活、ビジネスに多大な利得が

ございますというふうに、それも言っているのですけれども、多目的なのですね。ですから、それぞれの皆様のバックグラウンドに基づいて、そのどれか1つを強調していただければと思います。そのためにパンフレットをお手元にお届けしましたので、どれか1つだけでも。総合的に説明すると、かえってややこしくなりますので、1つピックアップして周りの方にもご説明して、賛成、支持の輪を広げていただけたらと思います。努力不足がある点は申し訳ございませんが、まだまだ頑張りますので、お願いします。

三ッ谷 三ッ谷と申します。今、大学で、スポーツとまちづくりというテーマで授業を1つ持っております。その前に、私は30年以上、スポーツビジネスコンサルタントということで、近年、15年か20年くらいは、スポーツイベントと、それによって地域はどういうふうに活性化されるかという視点でずっと眺めています。

先ほど、どなたか質問されましたけれども、オリンピックがあった、それによってその地域がどんなふうになるのかということに対して、このプロシユアにありますということで、たぶん、5ページの「更なる東京の進化とその共有」というような項目が該当すると思います。なかなか私どもには具体的に、例えば、駅がどうなるのかとか、もちろんバリアフリーとかユニバーサルデザインというふうに言われているのですが、「できました」という割には、まだまだ使い勝手が悪いというところもありますし、何かもう少し、きれいな言葉はもちろん結構ですけれども、分かりやすく何か具体的なものがもう少し見えると、より、「ああ、オリンピックが来て、もちろん世界最大のイベントが生で見られることはすばらしいけれども、それがきっかけで、こんなに住みよくなる」というようなことが具体的に分かったら、スポーツ好きでない方も、

「それだったら、ぜひ、オリンピックが来てもらって、みんな、住みよい、ひとつのモデルとしてなるのだったら応援しよう」というふうになるのではないかなと思います。

望月 よく分かります。先生のご指摘に対する一番良い答えは、東京2020年ビジョンを東京都で策定しており、予算もこれから20年に向けて付けていき、オリンピックに関係なしに、どのように変えていくかというビジョンが詳しく書いてあります。ブループリントです。それを参考にいただければ、もうちょっと具体的に、2020年までにこういう東京に生まれ変わるということがはっきり分かると思います。

ロンドンの場合、東ロンドンという多民族国家のスラム街のようなところがきれいになるぞ、というのは非常に分かりやすかった。東京は、もうかなり発展していますので、さらにこれを、年寄り、身体障害者、弱者のというような観点から改造するとか、さらに交通関係の効率化を図って、日本の経済成長を加速させるとか、2020年東京ビジョンに詳しく書いてありますので、ご参照いただければと思います。

もうひとつ、東京オリンピックは日本の精神的な面の改造です、日本人の。我々は、今、萎縮していませんか。日本人、日本は、実力はいろいろな面で1番なのです。ところが、何か自信を失って、日本全体に一種の閉塞感のようなものがあります。これは、政治の影響とか、いろいろな点があると思うのです。それから、大震災の影響もありますけれども、そういうものをひとつぶちこわす。次の段階に向かって発展させる、元気づけるというような効果がオリンピックにあると、私は感じます。オリンピックは万能ではありません。したがって、先生のおっしゃる都市面での新しい改造や発展と、日本国民全体の精神的な発展ですね、その2つの面を目指すのがオリ

ンピックだと思って私はやっております。

香中 株式会社博報堂の香中と申します。お話の中で、パラリンピックに対する扱い方というか、どうしてもオリンピックが中心になっていくような印象を、私、ロンドンのあとも受けておりました。例えば、ロンドンの場合は、たしかイギリスは、パラリンピックが終わってからメダリストたちが、オリンピックとパラリンピアンがロンドンの街なかをパレードした。ただ、銀座の場合は、たしか、オリンピックのメダリストだけで、パラリンピックのメダリストは、残念ながら、12月の東北には行かれていたようではございますけれども、銀座では見られなかった。ヨーロッパのほうはイコールに取り扱われているということの差が、実は、日本の場合、東京の場合、東京に影響を与えてしまうのではないかというところについて、少しご意見を伺えればと思っております。

望月 私は、日本障害者スポーツ協会というのがございまして、それは日本パラリンピック委員会の役員もしているものですから、この運動に身を投じているわけでもございまして。まったくおっしゃるとおり、東京オリンピック・パラリンピック大会というのですけれども、パラリンピックのほう弱い。どうしても弱い。特に日本の場合は影が薄いと。ただ、ロンドン大会では、NHKの協力のおかげでパラリンピック大会もかなり放映してくれましたので、日本国内での認識や認知度といえますか、かなり高まったと思います。

これは、実は、東京、日本だけが遅れているのではなくて、世界的な問題でして、国際パラリンピック委員会というのがございまして、そこの最大の眼目が“Awareness”というのです。“Aware”というのは、認知する。まだ障害者のスポーツに対する認知度が低いと。日本だけの問題ではないというのが世界

の一番の課題です。したがって、全体を底上げしなければいかんわけですが、中でも日本は、いわゆる欧米と比べると確かに遅れていますので、この東京オリンピックを機に、パラリンピック大会を並列で開催する。ロンドンの場合は事務局も一緒にやった。もともとロンドンには、パラリンピック大会、自称、発祥の地とされているわけですが、そういうことで、かなり前進しました。ロンドンモデルを追いつき追いつくのが東京モデルでございますので、ぜひ、パラリンピックのほうも、これをきっかけに発展させていきたいと思っております。

香中 どうもありがとうございます。

舛本 ちょっと補足です。今のメダリストのパレードの件ですが、実は、ロンドンパラリンピックが終わるまで待ちました。カナダは、もっと待って、9月21日の世界平和デーにパレードしたのです、オリンピックとパラリンピアンが一緒にです。そのようにオリンピック・ムーブメントの平和運動という理念と重ね合わせて運動しているような国もあるということです。

それから、ロンドンには「パラリンピックの価値」というものを打ち出しました。IOCは「オリンピックの価値」としては、エクセレンス、フレンドシップ、リスペクト、卓越、友情、尊重というものを掲げています。それに4つのパラリンピック価値というものをロンドンのオリンピック・パラリンピック組織委員会（LOCOG）は出したのです。実はこの辺は、賛否両論があります。最近ではパラリンピアンもトップアスリートとしてオリンピックとまったく同じ価値を目指しているはずで、「なぜ、わざわざパラリンピックという価値を設けるのか」というような意見もあつたりします。例えば、車椅子テニスの国枝慎吾さんと水泳の河合純一さんではまった

くスタンスが違うのですね。日本のトップにいらっしゃる方々でも、そのようにパラリンピックの価値を設けることに対する賛否がある。それくらい難しい問題なのです。障害者スポーツのプレゼンスといいますか、認知してもらうためには、そのような価値を掲げてもらったほうがいいという意見も納得できるところもあります。しかし、なかなか難しいですけど、世界はそのような配慮をしている中で、東京招致でももう少しパラリンピックの価値というものをうたってもよいのではないかという気がしております。

望月 パラリンピック、補足的にご説明しますと、もうひとつの問題は、障害者スポーツのパラリンピックのメダル争いが国際的に、ロンドンの例がいい例なのですけれども、すごいのです。健常者のオリンピックと同じようになってきてしまっているのです。これは皮肉な現象です。オリンピックと同列にパラリンピックを扱おうとしているあまり、国がパラリンピアンに援助して、優秀なパラリンピアンを集めて、それで、とにかくメダル獲得競争が激しくなっているのです。果たして健常者と障害者のスポーツを同列に扱っているのかどうかという基本的な問題があるのです。

例えば、中国がロンドンでは圧倒的に金メダルを取ったのです。1位でした。2位はアメリカでした、メダルの順序としては。ところが、中国のお国柄で、国威発揚もいいところですから、しかも、彼らのパラリンピアンというのは、傷痍軍人というか、戦争の犠牲者ではないですけれども、演習中にケガをしたり身体障害者になった人が多い。軍とか国が丸抱えでやっているわけです。そういう人と同列にやって、本当のフェアプレイなのかどうかという。今、舛本先生がおっしゃったパラリンピックの価値の問題というのが大きくなっていました。兼ね合いだと思うのです。

日本は、まだ、全体を認知するところまでいっていない。他方、それが行きすぎると、今のように国家に利用されてしまって、メダル獲得競争になってしまうという点で、なかなかそこら辺は難しい。やはり、まだ日本は努力する価値がありますし、オリンピックと並列で、オリンピックの枠内でパラリンピック運動を盛り上げよう。そういうことで、今、招致活動、私どもの活動の一部で、パラリンピックをさらに盛り上げようということでも面的にやっておるところです。

川口 TBS サービスの川口と申します。大きなことでひとつありまして、オリンピックは、メダルを取ったりとかということでトップアスリートの人たちが頑張るところで、それをみんなが見て、先ほども言ったように、憧れたりとか、元気が出るとかというのがあるのですけれども、実際にスポーツをやっている環境とか制度のところ、どうしてもそれに合っていない部分がいっぱいあります。オリンピックで、スポーツが非常にいいとか、スポーツ選手を育てるといっているのであれば、トレセンはできてきましたけれども、学校の中でのスポーツのあり方であるとか、これがまだ体育の域を出ていないとか、こういうことをやることによって国の制度を変えていくような、そういう流れを作るということは考えられないでしょうか。

舛本 それは佐伯先生あたりがお詳しいと思うのです。2020年の東京のプランニングを見ますと、一応、「スポーツ都市東京」ということをうたっています。Bid Fileを読みましても、スポーツのレガシー、スポーツ参加率がどんどん増えるような、あるいは、子どもたちや高齢者を含めたスポーツ参加が増えるような計画を東京都も書いています。しかし、参加率が上がるかどうかは別です。世界各都市でオリンピック大会をやったあと

の研究報告書でもいろいろな意見があるのです。2000年シドニー大会をやったあとは、シドニーの報告書には、スポーツ大国にシフトしたという意見もありますように、スポーツを実施する上で様々な改善はされていくのだらうと思います。それで、IOCも、OGIレポートに必ずスポーツのレガシーについてレポートするようなことを指定していますので、この面ではいい方向への影響を期待したいと思います。

川口 ありがとうございます。それと、もうひとつ、指導者の部分です。いろいろな技術とか、あるいは科学的なものとか、栄養面とか、いろいろなことが進歩している中で、指導者の方がそれに追いついていないというのがかなりあると思うのです。そういうものが、強いアスリートを育てる上でどういうふうにやっていくか。それを小学校とか中学校とか高校とかでどう変えていくか、みたいところが変わってくると、スポーツに向けてという考え方も変わるのではないかなと思って、質問をさせていただきました。

あと1点は、先ほど、3兆円の経済効果とあったのですが、これは、一般的に見ると、ホテルのお客さんが来る観光地であるとか、大企業であるとかというイメージがあるけれども、もっと日本国中がオリンピックによって燃え上がるようにするために、これは非常に難しいことなのでしょうけれども、商業主義になってから、ロゴマークとかそういうものの使い方がものすごく厳しくなって、スポンサーありきのところでそういう使い方をしているけれども、仮に、こういう招致委員会のマークができたなら、日本全国で、県別に特産品を5つまで、これを使って招致記念品を作っているとか、そういうことまでできれば、3兆円というのは見えないところで何となくあるような気がするのですけれども、もうちょっと身近に考えられるような経

済効果というのも、ぜひ考えていただきたいなと思うのです。

望月 そうですね。東京オリンピックではなくて、日本オリンピックだと言ったのは猪瀬さんです。東京以外の地域にインパクトを広げるといって、今言ったアイデアもひとつだと思います。東京オリンピックが来ますと、聖火リレーは当然、日本中を巡ります。その時に、まずはオリンピック運動が一般に知れ渡って、沖縄から北海道までずっと回りますから、盛り上がりがある。それに続いて、各地の産業がオリンピック関係で出てくるのがいいと思います。それは本当に各地のビジネスマンの人たちに、ぜひ考えてもらいたいと思います。オリンピックは東京だけでやるのではなくて、例えばサッカーの予選なんかは、決まっていますけれども、札幌と宮城スタジアムでやることになっています。そういう意味で、東京だけでなく、地方との関連というのも十分に意識してやりたいと思っています。

川口 ありがとうございます。

北川 ゼニスイメージの北川と申します。スポーツ選手をサポートするシステムとかの開発をしたりしております。よろしく申し上げます。

お話の中で、私もこのオリンピックを応援したいといいますが、招致に貢献したいということで、まず、知り合いを連れてここに来たのです。招致の段階から何か手伝えなないかという気持ちがすごくあります。「何かできないか」と言われて、先ほど、望月様から「募金です」と言われたときに、正直ガッカリしました。募金だけだったら、貢献しているというよりは、やっぱりお金かというふうには正直思いましたし、何か参加できる枠組みというのですか、そういうのが招致の段階か

らあってもいいのかなと思うのです。70億の予算があるという話を聞いて、その金額を聞いたときも、「あっ、そんなにあるんだ」というふうに思いましたし、その中で、オリンピックを招致して何かやりたいと思っている人たちをうまくまとめて、9月7日を迎えることができたなら、おそらくそのボランティアの人たちは、実際のオリンピックが決まったら、もっとこういうオリンピックにしたいという気持ちが高まると思うのです。決まってから「どうしよう」とかというよりは、そういう時間があるわけですから、そのためにボランティアの方を集めて何かやるというところに、70億の本当に500万でも、幾らがいいか分からないですけれども、そういう委員会とかを作って何かやるというのも、アイデアとしてもともとあったのではないかなと思うのです。そのあたり、もしご存じであれば教えていただきたいのです。

望月 一般の方々に、ぜひ、そういう直接参加していただけるような枠組みがあればいいと思うのですが、それは、例えば、東京都議会が実施している署名運動とかですね、これはあるのです。署名運動。既に日本国中でやっております、かなり活発に今やってお

ります。しかし、署名するだけですから、これではつまらんと。もうちょっとやりたいという方は、招致運動自身の枠内には直接入りませんが、いろいろなイベントをやります。渋谷のヒカリエでやったり、東京駅の前でやってみたり、招致委員会のホームページに予定を載せますので、そういうところに来ていただいて、一緒に、まさに参加していただく。そこにはアスリートにも来てもらっておりますから、皆様がアスリートと触れ合うチャンスにもなると思います。

お金も、75億では全然足りないのです、本当に。これは本当にお金が必要です。国民の、都民の皆様の税金はできるだけ使わないで、一般の寄付金によるようにしておりますので、そういう意味で、「お金を寄付してくれ」と言われるのはつまらないという気持ちは分かりますけれども、500円募金でも非常にありがたいのです。そういったところも、ぜひ、お願いいたします。

司会 ありがとうございます。これで、今日の情報交換会を終了させていただきます。

望月先生、舛本先生、ありがとうございます。

(終了)